
やり逃げ男と爆弾女

にゃこりー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

やり逃げ男と爆弾女

【Nコード】

N5144X

【作者名】

にゃこりー

【あらすじ】

やり逃げされた女性が数年後にやり逃げした男性に復讐(?)する機会を得て、
じつくりと男性を苦しめる。でもコメディ。

今回が初投稿で、長期の連載は難しいですが、

やり逃げ男の災難

「シンジ．．．シンジ．．．カエシテ．．．カエシテ．．．カ．．．返セエエエエー！！」

風呂上がりにはタオルで頭をガシガシふきながらビールを取り出そうと冷蔵庫のドアに手をかけた瞬間、背後のテレビから聞こえてきた女性のくぐもった声が男の背中をビクつかせた。

偶然にも男の名前は“シンジ”だった。

瞬時に背後のテレビへ振り返った男はテレビを睨んだ。

この女性の声はホラー映画の新作CMからの物で、つい2時間ほど前に男が受けた屈辱の原因になったものでもあった。

男はビールを手にするるとテレビの前にあるソファにドサツと座り、乱暴な動作で手にしたりリモコンで忌々しい声のするテレビを消した。

「ごめんなさい。お断りします。」

「え？」

男は女から発せられた、予想外の言葉をすぐに受け入れる事ができないでいた。

つい先ほどまで男はいつものように女の部屋のベッドで軽い運動をした後の高揚感に身を任せながら、隣で自分に背を向ける女の背中をなでていた。

いつもここまでで終わるのが習慣化していた男だが、今日は違った。

なんと、男は女にプロポーズをしたのだ！

男は今年で30になる。

高校時代に“女”を知ってから、今まで女から女へと飽きる事なく遊んできた。

運良く大手電気メーカーのサラリーマンとなつてからは、合コンに引つ張りだこで、毎回メンバーの中で一番人気の女をお持ち帰りしていた。

“彼女”という存在もいるにはいたが、女1人に落ちつくのにいささか抵抗があつた男に、“彼女”たちは皆付き合つてから1ヶ月程で男の前から去つていった。

そんな生活を繰り返してきた男に変化があつたのは、去年の事だった。

女にはだらしなくても仕事に関しては真面目な男は、仕事が忙しいのを理由に1ヶ月程合コンや女から遠ざかっていた。

そして仕事が落ちつき再び合コンを再開した1回目では出会った、料理教室の講師をやっている女と出会い、当然の事ながらお持ち帰りをした。

女は今までの女たちとは違い、男に媚びたりはせずただ行為を楽しむのみで、

女の口から次はいつ会えるかなどという、男にとって聞き慣れた言葉は出てこなかった。

男にとってこの感じはとても新鮮で、初めて自分から女の連絡先を聞くという行動をとった。

連絡先を交換してからは、合コンを続けながらも毎週のように女の部屋に行った。

女はいつも凝った夕食を用意していて、会話を挟みながら味わうそれを、男は密かに楽しんでいた。

その後は決まってベッドへ直行する。

女は男が他の女と遊んでいるのを知っているはずだが、決してそれを口にする事もなければ、束縛もしない。

女との関係が半年を過ぎると、

男の頭の中にある2文字が浮かび始めた。

“結婚”

男はこの女との関係が心地よかった。

いつも美味しい食事を用意して、口うるさくもなく、束縛もしない。
そして楽しいSEX。

男にとって何もかもが完璧だった。

そんな女となら結婚はそう悪くない。

男はそう考え始めていた。

それから数ヶ月経つ頃には男は女との結婚を視野に入れ、
少しずつ合コンの回数を減らしたり、他の女との関係を切り始めた。

そしてプロポーズ直後に戻る。

「なんで？」

「私たち付き合ってたりにしてないわよね？」

「え？ それは・・・」

「あなたは私以外にもたくさん女がいるわよね？」

「・・・」

「残念ながら私にとってあなたはただの性欲処理用の男でしかないの。」

「はあ!?!」

「あなただつて私の事をそう思ってたんじゃないの？
今まで私はそうだと思って接してきたけど。」

「・・・」

男は何も言い返せなかった。

男にとって今まで他の女たちの事をそう思っていたからだ。

まさかこの自分が目の前の女にそういう存在として扱われていたとは・・・。

「それにほら、今やってる新作のホラー映画の主人公の“シンジ”
つて、キャラ的にもあなたそっくりじゃない？」

そのCMを見るたびにあなたを思い出して笑わずにはいられないの
よね。」

男はその映画の事を知らなかった。

「悪いけど、女たらしのあなたとの結婚なんてありえないわ。もし結婚なんてしたら、知らない女から逆恨みされそうで怖いし。」

今まで女をぞんざいに扱ってきた罰なのだろうか、

男の頭の中は真っ白になっていた。

そして現在、

男は自宅で風呂上がりの体を冷ますように缶ビールを飲み干そうとしている。

あの後女には好きな男がいて、

その男が鈍感すぎてなかなか自分の物にできない欲求不満を、単純そうな自分を使って解消していたと話した。

他の男の代わりにされてただなんて、

屈辱以外の何物でもない。

この数ヶ月、真面目に結婚を考えていた自分が恥ずかしくなった。

自分はただの性欲処理の存在だったのに。

当然ながら、女との関係は今夜限りで終わってしまった。

プロポーズを断られ、

ふられた。

一晩で二度の初めての経験をしてしまった男は、しばらく立ち直れそうにない。

心躍る爆弾女

「うう〜!」

「ちょっと奈緒ちゃん？」

「あっ、すみません！ちょっと妄想してました。」

「だと思った。奈緒ちゃんの事だから、

またあの子の事でも考えてたんでしょ？」

「そうなんですよ！私が作ったカニクリームコロッケをあの子が
。」

「でも奈緒ちゃん、まだ作ってる途中なんだから、
妄想するにはまだ早いわよ！」

みんなあなたが成形し終わるのを待ってるんだから。」

「み、みなさんすみません！すぐ終わらせますから！」

女はすぐさま妄想をやめて現実に戻り、
彼女を待っている他の生徒たちの視線を感じながら、慌てて中断し
ていたコロッケの成形作業を再開した。

この奈緒という女は、現在料理教室にてカニクリームコロッケを作
っている。

しかも今日は自分が作っている様子をビデオカメラで撮影している。

この理由を知っている講師の友里は、そんな彼女を見ながら苦笑しつつも微笑ましく思っていた。

何も知らない他の生徒たちから“変人認定”されている奈緒だが、彼女はちよつとした有名人である。

阿久津 奈緒

この名前を聞くと、10人に3、4人は知っているであろう、最近人気が出てきた小説家なのだ。

しかしこの名前は当然の事ながらペンネームなので、普段は本名の佐々木奈緒として生活している。

彼女には愛する家族がいる。

つい2週間前に4才になったばかりの一人娘、みっ実生。

ちなみに奈緒はシングルマザーでもある。

元々恋愛に無関心で必要性を感じない彼女は、恋をしたこともなければ交際経験もない。

当然の事ながら実生の父親とも交際していたわけでもない。

実生の誕生は奈緒の人生設計の中には元々入る予定のないものだったが、

予想外の妊娠に驚きはしても案外あっさりと生むことを決めた。

それはちょうど小説家として軌道に乗り始めてきた時期だったのが大きかった。

高校時代に雑誌に投稿した小説が新人賞をとり、

大学卒業後はコンビニでバイトをしながら、執筆 活動に励んでいたのだが、

24の時にそれまで書いていたティーン向けの恋愛小説から、気分転換に書いたホラー小説が出版社に気に入られ出版したところ、地味に売れ始め、続くホラー2作目ではバイトを辞めても警沢をしなければ最低限の生活ができるぐらいになっていた。

そして小説家として波に乗り始めようとした矢先に妊娠がわかる。

元々生理不順で生理がない月があっても気にしなかったのが災いして、気づくのが少し遅れた。

しばらく体調不良だったのを母親から妊娠ではないかと指摘され、冗談半分で妊娠検査薬を生まれて初めて使ってみたところ、母親の目の前で見事に陽性反応を出してしまった。

歡喜をあげる母をよそに、奈緒は数十秒前に存在を知った我が子の父親の顔を必死に思い出そうとしたが、できなかつた。

数ヶ月前に友人から小説のネタになるからと、人数合わせのために無理やり参加させられた合コン。

異性と親交を深めようなんて気はさらさらない彼女は、普段より高めの声で騒ぐ女性陣と無理してテンションを上げているであろう男性陣の輪の中に入らず、黙々と飲み食いをしていた。

どういうわけかその夜は自宅に戻らず、翌朝は駅前のホテルの部屋で目を覚ました。

見慣れない天井が目に入った時はベロベロに酔っ払った自分を友人がホテルに連れて行ってくれたのだと思った。

しかし二日酔いからくる頭痛の痛みで意識がはつきりしだすと、下半身の鈍痛と自分が半裸である事に気づき驚いた。

心臓がバクバクし始めながらも人の気配を探ったが何もなく、自分が顔も名前も知らない男にやり逃げされたと認識した時は悔しくてしばらくベッドを蹴り続けた。

シャワーを浴びて頭痛と下半身の痛みに悶絶しながらホテルを出ると、携帯電話に友人から着信が入り、

昨夜酔っ払った奈緒を女性陣の1番人気だった男が介抱すると言って、自分を店から連れ出したまま戻らなかったと知った。

男はその場から逃げる口実に奈緒を使ったのだろう。

しかしそのついでに酔いつぶれた女を相手にやるなんて、男として最低だ。鬼畜だ。

奈緒は友人に男が自分に何をしたかを話すと、友人は初めこそ怒り

はしたが後半はなぜか羨ましがられて困った。

こんな経緯もあり、中絶する事も考えはしたが、娘の結婚や孫の誕生を諦めていた母の説得や、妊娠中や出産後もあまり仕事に影響はないだろうという事もあり、奈緒は出産する事を選んだ。

これが意識のある状態でやられていたら違う選択を取っていたかもしれないが、

奈緒自身には酔っ払っていたせいで幸か不幸か、その時の記憶はなかった。

要するに彼女は

“コウノトリが赤ちゃんを運んできてくれた”

という、都合の良い解釈をしたのだ。

そうして誕生した実生。

生まれてからしばらく経って、我が子の目が自分とは似ていない事にショックを受けたものの、やはり1年の半分以上を共に過ごし、お腹を痛めて生んだ我が子を愛さずにはいられない。

そうして現在も愛する娘のために料理教室に通い、今晚の夕食になるカニクリームコロッケを作っているのだ。

「今夜はこれで大丈夫ね！」

カニクリームコロッケが完成し、試食の後に奈緒以外の生徒が全員帰った後、
自分が作ったカニクリームコロッケをタッパーに入れている奈緒に、
友里が声をかけた。

「えへへ。このコロッケとビデオと友里サマがいてくれたら実生は大丈夫！」

「よし！それじゃ今からこっちの準備もしようか。」

友里に促されて奈緒はキッチンから別室に移動し、今夜決行する待ちに待った大仕事の準備に取りかかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5144x/>

やり逃げ男と爆弾女

2011年11月16日10時40分発行